



TITLE:

恩師の遺骨を拾ふ

AUTHOR(S):

高木, 眞助

---

CITATION:

高木, 眞助. 恩師の遺骨を拾ふ. 經濟論叢 1941, 52(6): 756-758

ISSUE DATE:

1941-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/131545>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

## 論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者勞働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

## 時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

## 記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

## 恩師の遺骨を拾ふ

高 木 眞 助

御逝去の十日ほどまへ、久し振りでお目にかゝつたとき、先生のお顔に「むくみ」がでてゐるように思はれて、氣懸りでならなかつたが、數日後いつもの奔放自

在な御筆蹟のお葉書を頂いて、安堵した氣持になつてゐた。京都の本屋にないから大阪で本を探してくれないかといふ御文面であつた。それからまた數日後、いよ／＼大阪に出掛けるつもりで、校門を出て二町とゆかないうちに、後から自轉車で追駈けてきた同僚が、手渡してくれた電報が、あの御長逝の通知であつた。取るものも取りあえず、そのまゝ御宅に駆けつけたとき、先生はすでに香り高い鈴蘭の中に埋まつて、口邊には微笑を湛へられ、頬の邊りには紅潮をさえ帯びて、いまにも語りだされさうな表情で、安らかに眠つてをられた。「大聖の臨終」ともいふべき御姿であつた。

まだ早稲田のころ、參考書として挙げられた「植民政策研究」を讀んで、非常な興味を覺えたのが、先生のお名前を知つた最初である。それから京都大學にきて、一年で植民政策、二年で工業經濟の講義を聴き、三年で演習の幹事に選ばれてから、親しく先生に接する機會に恵まれたのであつた。その時の演習は、わが國の植民地中、樺太および南洋群島の研究であつた

が、演習生一同、先生の植民地事情に明るいのに驚嘆したものであつた。何でも統計表によると、南洋群島の婦人にかぎり、非常に皮膚病が多く、どうしてもその原因が判らないので、時の報告者は多分性病の蔓延によるものと思ふと片づけると、先生は笑ひながら、土人の常食たるタロ芋の栽培は、婦人の仕事であり、それは蓮のように濠に作るからだと教へられたので、一同どつと噴き出したことを覚えてゐる。

爾來今日まで、誤つて志陽門下に連なることを許されたが、過去十二年の間を振りかへつてみると、何となく「凡庸卑俗の身をもつて、幾多俊鋭なる先輩同學の間に伍しつゝ、聖堂に奉仕するを許された」といふ感じがしてならない。

先生は決して「クリスチャン」ではなかつた。宗教家と俗人とを止揚した、古武士の風格と傑僧の含蓄とに一脈相通する、ほんとうの意味の宗教人であつたやうに思ふ。従つて正を執つて怖れざる信念の人であり、自らは一舉一動をも苟めにせざる峻厳さを持しなが

ら、他人には我意を強ひざる徳操の士であり、我儘を咎めだてせざる慈父であつた。誰も門下生で先生に怒られた者を聞いたためしがない。陰でオヤチとお呼びしてゐたごとく、みな郷里のオヤチ以上の慈愛を感じてゐた。先生のくだけた一面は、あまり知られてゐないが、お正月など、不肖の末弟子共は、よく多勢を恃んでは夜遅くまで、先生に下様の世話ばなしを持ちかけたものであつた。美術の話に始まつて、喰べ物の話、キネマの話、喫茶の話、等々。そんな時でも、先生は弟子共の不法法をお咎めなく、終始微笑しながら聞いて下さつた。最初は、講壇で仰いだ先生との對照にむしろ驚いたくらいである。

先生は曾つて、マルキシズム華やかなりしころ、植民政策の研究が青年學徒から疏んぜられ、植民社會學の方向に遊離していくのを深く遺憾とせられたが、近來はまた、事變の進展とV教授の失脚とを契機として、先生の著書を、先生のお名を掲げることもなく、縮小再生産した便乗的出版物の氾濫することを苦々し

追 憶 文

く思はれ、數年來、「植民政策研究」の改訂に志してをられたが、御健康が許さず、我々もまた御手傳申上げる餘裕を失なひ、世界的名著の改訂を第三分冊で中絶せしめたことは、何よりも残念に思ふ。

昭和十六年五月十五日、満山つつじ匂ふ衣笠火葬場で餘燼なほ消えやらぬ灰の中から、いまは變り果てた恩師の遺骨を拾ひつゝ、ふと改訂中絶のことが腦裡に閃き、續いて更らに、御生前、先生の高底に學問的に應へえざりし自分自身のだらしなさに氣づいたとき、松籟の中から、「お前は何の資格あつて恩師の遺骨を拾ふのだ！」と大喝されたような氣がした。奮起せねばならぬ。